

わんわんぴーす

今日坂

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ONE PIECE第1話をパロディした、けものフレンズ2の二次創作小説です。キュルルがルフィ、アムールトラがシャンクスの役です。

目次

第3話	第2話	第1話
19	12	1

第1話

◆まだヒトとフレンズが一緒に生活していた時代に、あつたかもしれないしなかったかもしれない、そんな物語。

僕はキュルル。広大なジャパリパークの片隅の、ヒトが暮らす小さな村で生まれ育ったんだ。パークで生活してると言っても、特別何かあるってわけじゃない。絵を描いたり体を動かしたりするのが好きなくらいで、至って普通の子供だよ。ただ髪を整えるのが面倒だからボサボサだったり、いくらお母さんに言われても帽子を被る習慣が身に付かないってのはあるけどね。

まだ村の外に出た事はないんだけど、本で読んだり大人たちから外の世界の話を聞いたりするとワクワクするんだ。ああ、早く大きくなってこの目で広い世界を見てみたいよ。

ところがこののどかな村で数日前からセルリアンが何度も目撃されるようになって、ちやつて、村人はセルリアン討伐を専門に請け負うフレンズ：通称ハンターのヒグマに討伐を依頼したんだ。

そして彼女がやってくるのと同時にふらりと現れたのが、各地を回ってセルリアンを

倒しているっていう、青い羽のついた水色の帽子を被ってるアムールトラのフレンズ：通称『青帽の虎』が率いるネコネコ団だったんだよ。

優雅で無駄のない身のこなし、強靱かつしなやかな腕、そして小さな帽子にはとても収まりきらない燃え上がるように揺れるオレンジ色の豊かな髪と、黄色いチェック柄のリボンで括られた白毛のふさふさしたおさげ…、

僕はそんなアムールトラを一目見るなり憧れちゃった。さらに彼女たちの数々の武勇伝を聞いてすっかり夢中になった僕は、大きな声でこう言ったんだ。

キュルル「アムールトラ、僕も旅に連れてってよ！」

もちろん僕は本真面目だったんだけど、彼女の返事はこうだった。

アムールトラ「やーだね、キミが大人になったら考えてあげるよ。」

ヒグマとネコネコ団はおのおのでセルリアンを探していたんだけど、数日経った今も事件は解決していない。

その間も僕はアムールトラと顔を合わせる度に「一緒に旅がしたい！」って頼んでるんだけど、てんで聞き入れてもらえなかつたんだ。どうしたら連れてってもらえるんだろう…

そして今日もアムールトラの事ばかり考えながら通りを歩いていると、向こうから彼女たちの楽しげな話し声が聞こえてきた。ならやるべき事はひとつしかない、僕はそ

こへ向かつて一目散に駆け出した。

ここはこの村でひとつだけのカフェ。こじんまりとした店内には、カウンターと3つの丸いテーブルが置かれている。カウンターの中には店長のミライさんと店員の菜々がいて、テーブルではネコネコ団のみんながジャパリソーダの注がれたグラスを傾けながら談笑している。

アムールトラ「ングングング、くうー、この喉越し、たまらないねえ！2人もジャンジャン飲んで、英気を養ってくれよ！」

サーバル「そんなに飲んだらお腹タポタポになっちゃうよ、アムールトラ！ところでここへ来てから何日か経ったけど、どれだけセルリアンをやったんだっけ？」

カラカル「一昨日2体昨日が3体、どれもちっちゃいやつだったけど、こんな平和な場所で自然発生したにしては数が多すぎるし、相変わずセルリアンを見たってヒトも現れてる。ホントどっから湧いてくるのかしらね。」

アムールトラ「ふむ、まさかこんなに手間取るとは思わなかったけど、一度引き受けた依頼を途中で投げ出すわけにはいかないな。けど今のやり方だと、原因がはつきりするまでどれくらいかかるか。」

そう呟くとアムールトラは、グラスを一気に飲み干した。

アムールトラ「くあーつ、最高！ま、ここは居心地がいいし、のんびりするの悪くないな。」

サーバル「村のヒト達も優しいしね、ただ……」

カラカル「アンタの熱烈なファンが元氣すぎるのがねえ……思いがまつすぐなのがわかる分、断り続けるのも気の毒になってきたわ。……つと、噂をすれば。」

ドタドタドタ……

表の通りから、もはや彼女たちにとつてはお馴染みの足音が近づいてきた。そして窓からキュルルが勢いよく店内に飛び込んできた。

窓から店に入った僕は、そのまま一直線にアムールトラの元へと走った。

キュルル「ねえアムールトラ、今日こそ僕も旅に連れてつてよ！」

ペシッ

けれどもアムールトラは、ニヤニヤしながら僕のおでこを指で弾いた。彼女が被っている水色の帽子、その左側面について一枚の青い羽も笑っているかのよう揺れている。

アムールトラ「だーめ、もつとおつきくなってから！」

いつものように適当にあしらわれ、僕はおでこをさすりながらほつぺたを膨らませ

た。

キュルル「ちえ、みんなが思ってるよりずっと僕は強いんだよ！」

そこへ菜々がやってきて、僕の頭をポコンと小突いた。

菜々「こら、お行儀よくしなさい！」

おまけにミライさんまでくすくす笑っている。

ミライ「今度はドアから入ってきてくださいね。」

キュルル「なんだよ、みんなして！」

むくれていると、サーバルとカラカルも話しかけてきた。

サーバル「ねえキュルルちゃん、アムールトラは意地悪してるわけじゃないよ。」

カラカル「ゼーンぶアンタを心配しての事よ。幾多の戦いをくぐり抜けてきて、セルリアンの強さも怖さもよつく知ってるの。それにああ見えて頼りがいがあつてね、野生解放だつて使えるし、あたし達も一目置いてる立派な団長なんだから。」

でも僕は2人に向き直るとムキになって叫んだ。

キュルル「嘘だ！ただ僕をからかつて遊んでるんだよ！サーバル達だつていっつも

笑つて見てるじゃないか！」

サーバル「そんな事ないよー。」

とかなんとか言いながら頬が緩みっぱなしのサーバルと、

アムールトラ「おねーさん達も一緒に飲もうよー。」

ミライ、ナナ「やだもー。」

チャライ態度で2人にちよっかいを出すアムールトラ、

カラカル「アンタは！もうちよっかつかりしなさいよ！」

そしてそれを呆れ顔で嗜めるカラカルだった。

どんなに叫んでも誰も僕の力を認めてくれないのがつかりしていると、ふと床に何が転がっているのを見つけた。ん、なんだこれは…？

カララン

すると店のドアが開く音とともに、ヒグマがのっそりと入ってきた。

彼女は通称『眠らずのヒグマ』。依頼を終わらせるまでは決して眠らずにセルリアンを追いつけるためこう呼ばれているんだけど、そのせいで非常に目つきが悪いんだ。さらに今回は解決までに日数がかかっているため、目は血走りその周りに深い隈が刻まれていてより一層恐ろしく見える。

ミライ「あら、こんにちはヒグマさん。」

菜々「いらつしやーい。」

ヒグマ「…いつものヤツを頼む。」

そう言つてヒグマはふらつきながらカウンターに向かうと、崩れ落ちるように椅子に

腰掛けた。彼女はいつもそこに座っていた。なんでも誰かの手を煩わせるのが嫌で、テーブルに飲み物を持ってきてもらうことすらさせたくないのだからか。

そして菜々からジャパリソーダがなみなみと注がれた大きなジョッキを受け取ると、ガブガブと飲み始めた。

菜々「お疲れ様です。まだかかりそうなの？」

あつという間に半分を飲み干したところでヒグマはジョッキを置き、暗い顔で呟き始めた。

ヒグマ「…ああ。何匹か小さいのを吹き飛ばしたんだが、どうもスッキリしない。きつとどこかにデカいのがいるんだ。」

するとそこへ、アムールトラがニコニコしながらやってきた。

アムールトラ「やあ、大丈夫？そんなに根を詰めてたらへたばつちやうよ。第一そんなフラフラで戦えるの？」

アムールトラは明るく話していたが、ヒグマはうつむきながら全身をカタカタと震わせ始めた。

アムールトラ「睡眠不足は良くないよ。お肌も荒れるし、大切な事を見落としやすくなるし、何より生きてて楽しいって気がしなくなる。そうだ、よかつたら私達と一緒にセルリアンを探さないか？なんだったら疲れが取れるまで休んでよ、その間に私達が

きつちり事件を終わらせて…」

バシヤ!

ヒグマは苛立ち紛れにジョッキに残っていたジャパリソーダをアムールトラの顔にぶちまけると、ガタン!と大きな音を立てて椅子から立ち上がった。

ヒグマ「私は誰とも組まない!誰かがセルリアンに取り込まれる姿を見るのはもうたくさんだ!それにお前みたいなヘラヘラしてる奴は、絶対に信用しない!!?」

そう叫ぶと、足音荒く店から出て行つた。

ミライ「ちよ、団長さんっ!!?」

菜々「大丈夫っ!!?」

ミライさんと菜々が慌ててタオルを差し出したが、アムールトラはいーのいーのと手をヒラヒラさせている。そしてサーバルとカラカルも、顔色ひとつ変えずにのほほんとしている。

サーバル「あーあ、やられちゃったね。」

カラカル「鬱陶しいってさ。少しは懲りた?」

アムールトラの帽子や毛皮からは、ポタポタと雫がしたたり落ちている。

アムールトラ「そうだなあ、これを機に私ももう少し落ち着いた行動を…」

すると帽子の下で、アムールトラの口がニイツと大きく歪んだ。

アムールトラ「するわきやないよなあ、アーハツハツハ!!?」

サーバル「だよー!」

カラカル「それでこそアンタよ!」

そう言つて3人は大声で笑い転げた。ミライさんと菜々も、つられてくすくす笑つて
いる。

それを見た私は、怒りで全身をわななかせながら怒鳴り声を上げました。

キュルル「なに笑つてるんですか!あんな目に遭わされて悔しくないんですか?!?」

そんなにあいつが怖いんですか?!?」

サーバル「まあまあキュルルちゃ…ん?」

カラカル「言いたい事は分かるけど落ち着いて…えっ?」

そんな私をなだめようとした2人の顔が、どういふわけだかサーツと青ざめました。

しかしアムールトラはそれに気づかず、手で顔を拭いながら呑気に笑つていました。

アムールトラ「あのね、ちよっかいを出したのはこの私だし、ただ水をかけられただけだ。こんな些細な事で腹を立てないのが大人つてもの…だあああ!!?!?」

今度はアムールトラが青い顔をしながら叫びました。そして彼女は声を震わせながら私を指さしました。

アムールトラ「キュルル…、その姿…」

キュルル「どうしたんですかさつきから…、ええつ、なんですかこれえーっ!!?」

ここにきて、やつと私は自らの体の異変に気が付きました。なんと私は、いつの間にか灰色の毛で覆われたイエイヌのアニマルガール…フレンズの姿になっていたのです。そういえば先程から声色が変わっていて、違和感がありました。

するとサーバルが慌てた様子で、自身の身体をまさぐり始めました。

サーバル「ないよっ!!?毛皮にしまっぺおいたイエイヌの輝きが!」

アムールトラ「なにい!!?」

カラカル「キュルル!!?アンタもしかして触ったんじやあ…」

3人の剣幕からからだだならぬ気配を感じ、私はモジモジしながら答えました。

キュルル「はい、床にキラキラした結晶が落ちてて、綺麗だったのてつい…。触ったらばあつて光った後消えちやいましたけど…」

するとアムールトラが身を乗り出してきて、すっかり変わってしまった私の顔を両手でがっしり掴んでからぐっと引き寄せました。その顔からは冷や汗が滝のように吹き出していて、今まで見た事がないくらいうろたえているのが一目で分かりました。

アムールトラ「あれはフレンズを取り込んだばかりのセルリアンを吹っ飛ばした時、たまたま出てきた特殊なサンドスターだ!ヒトが触ったら犬人間、その上一生お出かけできない体になつちまうんだぞ!!?」

その言葉でようやく事の重大さに気付いた私の顔と手のひらと足の裏から、アムールトラ以上の滝のような冷や汗が吹き出しました。

キュルル「ええーっ、ウソーっ!!!」

アムールトラ「バツカ野郎おおおーっ!!!」

そんなこんなで店内は大パニックとなつたのですが、どうする事もできませんでした。

それからアムールトラ達は私を両親の元へ連れてゆくと、首がもげんばかりの勢いで平謝りしました。当然両親も大きなショックを受けていたのですが、私が結構すんなり状況を受け入れていたために事態はすぐに収まり、アムールトラ達が村を追い出される事はありませんでした。

第2話

その夜、私はベッドの中でいつまでも起きていました。何度目を閉じても、今日あった出来事が次々と頭の中に浮かんできて眠れなかつたのです。

キュルル「はあ、もうアムールトラと一緒に旅をする事は出来なくなっちゃいましたね……。でもあの子達がここに居る間くらい、何かお手伝いしたいなあ……」

ゾクリ

突然、私の全身の毛が逆立ちました。そして私はベッドから飛び起きると、キョロキョロとあたりを見回しました。

キュルル「なんででしょう……。近くにとても嫌なものがいます!」

フレンズになつたせいで、今の私の感覚はヒトを遥かに凌駕していました。体がガタガタと震えて、とてももう一度横になる気にはなれません。たまらなくなつた私はベッドから抜け出すと、そのまま家を飛び出してアムールトラ達が眠っているはずの宿屋に向かつて走り出しました。

そして近道をしようと思つぱに足を踏み入れたところで、右側から何かの視線を感じ立ち止まりました。

そちらには、私の顔程の大きさの一つ目が闇の中に浮かんでいました。ギョツとしてさらに目を凝らしてみると、全身が紺色で私の腰くらいの高さの蛇のような体をした小型セルリアンが、じつとこちらを見ているのが分かりました。

するとそいつは突然全身を縮めた後、猛烈な勢いで私に飛びかかってきたのです。

キュルル「わ…、うあああーっ！」

ばっかーん！

しかし、小型セルリアンの体が目の前で弾け飛びました。そして入れ替わりに空からヒグマさんが降りてきて、私の前に着地しました。彼女は先端に大きな熊の手の付いた武器を構えつつ、正面を向いたまま凄みのある声で怒鳴りました。

ヒグマ「無事か？こんな時間に何してるんだ！」

キュルル「ごめんなさい！私、なんだか嫌な感じがして、アムールトラ達に知らせようと思ったらセルリアンが現れて…。」

すると私たちの目の前に、さらに3体の小型セルリアンが体をくねらせながら現れました。

キュルル「ひっ…！」

ヒグマ「お前はじつとしてろ！あれくらい、私が一発で片付けてやる！」

その言葉が終わるやいなや、ヒグマさんはセルリアンに飛びかかりました。

しかし突然、彼女の足元の地面からいくつもの目玉の付いた紫色の巨大な塊が現れ、ものすごい勢いで体当たりしてきました。

ドガツ!!

不意を突かれたヒグマさんはとっさにガードしたものの、そのまま地面に叩きつけられてしまいました。

ヒグマ「こいつはっ…セルリアンの集合体?!? くそっ、私が今まで相手してたのは分身で、本体は地面の下に潜ってたのかっ…!」

キュルル「ヒグマさんっ!」

私はすぐさま駆け寄ろうとしましたが、すでに彼女の体にはおびただしい数のセルリアンが絡み付いていました。

ヒグマ「来るな、お前だけでも逃げろ…!」

そう言い残して、ヒグマさんは大型セルリアンに取り込まれてしまいました。

そしてまるで高い塔のような大型セルリアンが、ずっと私の方を向きました。その体のあちこちにある巨大な目が、ギロギロと蠢きながら私を睨んでいます。すると頭上のひとときわ大きな目の下に、巨大な口がポツカリと開きました。

キュルル「あ…、あ…:…。」

私は頭の中では必死に逃げようと考えていたのですが、足がすくんで動けませんでし

た。

グオオオーン！

セルリアンの絶叫で、周囲の空気だけでなく地面までもがビリビリと揺れました。そして大型セルリアンが大口を開けて飛びかかってきました。

私は全身を縮こませ、思わず目を閉じました。すると、不意に体が浮き上がったような感覚がしました。

ガチイイーン！

セルリアンの口が勢いよく閉まる大きな音があたりに響き渡りました。そして恐る恐る目を開けると、誰かが私を右腕で抱き抱えていて、地面には見覚えのある青い羽のついた水色の帽子が落ちていました。

そして助けてくれた方の姿を目の当たりにして、私は目を剥きました。

キュルル「アムールトラ!?？」

オオオオーン！

再び大型セルリアンが雄叫びを上げながら私たち目掛けて突進してきました。しかし……

アムールトラ「…失せろ。」

アムールトラの怒気のこもった唸るような声が、感情を持たないはずのセルリアンを

も怯ませました。そのあまりに圧倒的な迫力に、私だけでなく夜の闇までもが震え上がったのではないかと思えるほどでした。

それと同時にその目が黄金色に輝き、全身から立ち昇った金色の輝きこんじきが右の爪に注がれてゆきました。そして彼女が勢いよく右腕を突き出すととてつもない衝撃が発生し、ゴツという音と共に大型セルリアンの上半身が跡形もなく消し飛びました。

ぱっかーん！

そして次の瞬間には、派手な破裂音と一緒にセルリアンの全身が弾け飛んでいました。

そして地面には、先程取り込まれたヒグマさんが倒れていました。どうやら救出が早かったので助かったようです。

そのキラキラしたかけらがあたりを散らばる中、私は泣きじやくりながらアムールトラを見つめていました。

キュルル「ひつく…、ひつく…!!」

そんな私をよそに、アムールトラは優しく語りかけてきました。

アムールトラ「ごめんね、怖い思いさせて。昼間はしやぎすぎたせいかぐつつすり眠っちゃっててね、キミの叫び声で目が覚めたんだ。やっぱり私は、もう少ししっかりしないと駄目だね。」

キュルル「えぐ…、うつつ…」

アムールトラ「ほら、怖いやつは吹っ飛んだんだからもう泣かない。そんなんじやおつきくなれないよ？」

しかしいくら優しい言葉をかけられても、私はとても安堵する事はできませんでした。それどころか悲しみが押し寄せてきて、声を発するのはおろか息をすることさえままなりません。そうしてやつとの思いで絞り出した言葉は、嗚咽で潰れた悲鳴のようなものでした。

キュルル「だって…アムールドラあ…、腕が!!？」

なんと彼女の左腕は、私をかばった際根本からセルリアンに食いちぎられていました。フレンズの特性上流血こそありませんが、断面からキラキラとサンドスターがこぼれ落ちていきます。

思うにその激痛とショックでいつ気絶してもおかしくありません。にもかかわらず、アムールトラは辛そうな顔一つせず私の頭を撫でながら笑顔を浮かべていました。

アムールトラ「安いもんだよ、腕の一本くらい…。大切なお友達を守れたんだから！」
そこへ、サーバルさんとカラカルさんが息を弾ませながらやってきました。

サーバル「宿から野生解放して飛び出すなんて、無茶苦茶だよ…あ!!？」

カラカル「戦う前に消えちゃったら何にもならないじゃないっ！ヒグマだっているん

だからそうそう危ない目には…て、アムールトラ、アンタっ…!!?」

キュルル「う…、うわああああああつ!!?」

とうとう私は堪えきれなくなり、アムールトラにしがみついたまま大声で泣きました。

第3話

それから私とアムールトラとヒグマさんは、サーバルさんとカラカルさんに抱えられながらカフェへと運ばれました。

2人はそこで応急的なサンドスターによる処置を受け、どうにか峠は越えました。

私はいえ、カフェにたどり着いたところで安堵と疲労が一気に押し寄せてきて、そのまま気絶してしまいました。

それでもそれからのやり取りは、ぼんやりながらも耳に入ってきていました。

アムールトラはミライさんの提案で、彼女が運転するジャパリバスでセントラルパークの治療センターまで連れて行ってもらう、そこで左腕の再生手術を受ける事となったのです。

その翌朝、私はカフェ2階の菜々さんのベッドで目を覚ましました。そしてすぐさま飛び起きて耳を澄ましてみたのですが、あたりは物音ひとつしません。どうやらアムールトラ達は、もう既に出かけてしまったようでした。

それが分かった途端、あの悲しみがまた一気に押し寄せてきて、私は大粒の涙を流しながら激しく泣きじゃくりました。アムールトラがあんな大怪我をする原因となった

のは私…、さらにその光景までもが有りありと浮かんで来て、涙が止まりません。

しかし勢いよく鼻をすすった瞬間、外からアムールトラの匂いがしました。慌てて窓から表の様子をうかがってみると、一台のジャパリバスの前に人が集まっていました。そうです、村を救ってくれた英雄達を村人総出で見送っていたのです。

キュルル『まだ間に合う…!』

私は勢いよく階段を駆け降りてそのまま店を飛び出すと、涙を拳で拭いながら必死に通りを駆け抜けました。アムールトラの前では絶対に泣かない、そう心に誓って。

やがて人だかりが見えてきました。私は無我夢中でそれを押し分けたりかき分けたり飛び越えたりしながらバスへと向かいました。すると私の耳にアムールトラ達の声が聞こえてきました。私は彼女達に呼びかけようと思いました。すでに息が上がって言葉が出せません。なので最後の力を振り絞り、どうにかバスの前へと飛び出しました。

するとちょうど村人達とのお別れが済んだところで、ミライさんはすでに運転席に座っていて、他の5人は私に背を向けバスに乗り込もうとしていました。

ミライ「それではみなさん乗ってください、事態は一刻を争うんですから!可愛いフレズさんがこんな目に遭うなんて…私の胸は今にも張り裂けそうですっ!!?」

こう息巻くミライさんを横目に、アムールトラは苦笑していました。

アムールトラ「そんなに焦らなくても私は大丈夫だよ、ミライさん。菜々「絶対に安全運転させるから、心配しないでね。」

そう言いながら菜々さんが、ミライさんの隣に腰を下ろしました。

ヒグマ「どんな危機が襲ってこようが私が守ってみせる。任せてくれ。」

サーバル「無理しないでヒグマ、私達だっているよ……でもやっぱりキュルルちゃん、起こしてあげた方が良かったんじゃないかなあ。」

カラカル「目が覚めたら恨まれるでしょうけど、団長の命令じゃ仕方ないわ。…アムールトラだって辛いだよ。」

そう言つて3人は、名残惜しそうにバスの客席に乗り込みました。そしてアムールトラも乗り込もうとしたその時…

キュルル「待つてください!」

私はどうにか声を絞り出しました。すると彼女はびつくりした顔をしながら振り向ききました。また、他の5人も驚いた様子でバスの中から私を見ていました。

私は荒い呼吸を落ち着かせようと必死でした。さらにアムールトラを前にした途端、胸の中に様々な感情が込み上げてきて、もう息が詰まりそうです。かろうじて涙を堪えている目も、一度まばたきをしたらどうなるか分かりません。それでもなんとか、この思いを言葉にすることができました。

キュルル「絶対…、絶対また会えますよね!?!」

すると彼女は笑みを浮かべながら頷きました。

アムールトラ「ああ、必ず戻ってくるよ、約束する。…そうだ。」

そう言うアムールトラは、被っていた帽子を私の頭に被せました。そして、とても穏やかな口調で私にこう語りかけました。

アムールトラ「この帽子をキミに預ける。これはまだ動物だった私を助けてくれたヒトの形見なんだ、私が帰ってくるまで大切に守っていてくれ。」

キュルル「……………!!」

私は奥歯が砕けそうになるくらい歯を食いしばっていました。…、ああ、もう駄目です、堪えきれません。とうとう涙を流してしまいました。しかし幸いな事に帽子の陰に隠れていたのです、おそらくアムールトラには見えていないでしょう。でも万が一ということがあります、私は無言で頷くと、絶対に涙を見られないようにバツと後ろを向いて叫びました。

キュルル「必ず守ってみせます!…大丈夫、私は強いから泣きません!!?!」

所々涙で言葉がつかかり、背中はずぶずぶと震えています。私が泣いている事は誰の目にも明らかでしょうが、私にはもう、こうするしかありませんでした。

たとえ直接見ることはできなくても、フレンズとなった今の私には背後のアムールト

ラの様子を手にとるように分かりました。彼女は満足そうに微笑むと、しつかりとした足取りでバスに乗り込んでゆきました。

そしてエンジンがかかり、バスが静かに発車しました。次第に音が遠ざかってゆきます。すると突然アムールトラが窓から身を乗り出してきて、晴れやかな顔でこう叫びました。

アムールトラ「行ってくる！しつかりね!!大好きだよー!!!」

そんな彼女の瞳は、涙でキラキラと輝いていました。

そう言つて、アムールトラはセントラルパークへと旅立ちました。

フレンズになつてしまった時から感じていたのですが、私がヒトだった記憶は時間が経つにつれてどんどん薄れてゆきました。なので全てを忘れてしまう前に、私は自分の姿を絵に描いて残しておく事にしましたのです。

まずは真ん中に、アムールトラから預かった帽子を被っている私を描きました。それだけだと寂しいので、向かつて右側にサーバルさん、ミライさん、菜々さんを。そして反対側にカラカルさん、それと今の私を描きました。それからその間には、右手を私の頭に乗せたアムールトラを描きました。ただ左腕は描きませんでした。

いつか腕が元に戻つたアムールトラが帰ってきたら、記念に描き足そうと思つたので

す。また、そうして完成した絵を帽子と一緒に彼女に渡そうとも考えていました。

しかしあれつきり、アムールトラは帰ってきませんでした。彼女がどうなったのか、はつきりした事は誰も教えてくれませんでした。それでもちらほら聞こえてきた話をまとめると、なんとか腕は元通りになったものの、傷口から体内に入ったセルリウムのせいで彼女は『ビースト』と呼ばれる状態となり、ある日治療施設を飛び出してそのまま行方不明になってしまったそうです。

もちろん私は探し出そうとしました。しかしアムールトラの言った通り、どんなに頑張ってもこの村から出る事はできませんでした。

なので私は彼女が戻ってくるのをひたすら待ち続けました、何年も、何年も…。

それから途方もなく長い年月が経ちました。いつしか私の周りからヒトはいなくなっていました。どうしてそうなったのか、今ではもう思い出せません。また私の手元には、ボロボロの羽のついた色あせた帽子と誰かが描いたであろう絵があるのですが、これがなんだったのかも覚えていません。でも何かを待ち続けなければいけない、そんな思いだけはハッキリと残っています。

私はずうつとひとりぼっちで過ごしていたのですが、ある日探偵だと名乗る2人のフレンズがやってきました。話を聞いてみたところどんな探し物でも見つけてきてくれ

ると言うので、寂しかった私はヒトを探して連れてきて欲しいと依頼しました。

それから数日後、2人は約束通り2人のフレンズと、青い羽のついた水色の帽子を被った1人のヒトを連れてきてくれました。それは絵に描かれている子達とそっくりで、私は嬉しさのあまり夢中でそのヒトに飛びつくと、千切れそうになるくらいブンブンと尻尾を振りながら叫びました。

イエイヌ「おかえりなさい、ここがあなたのおうちです！」